
としょコイ。～閉店営業図書室と、集いし若人たち～

熊川修

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

としよコイ。〜閉店営業図書室と、集いし若人たち〜

【Nコード】

N4681Z

【作者名】

熊川修

【あらすじ】

市内唯一にして中高一貫のマンモス校、呉野学園。

そこに通う高等部一年生、赤城高雄は図書委員である。

彼は今日も来訪者皆無な図書室にて、孤独な当番活動に勤しんでいた。

しかしある日の放課後、図書室前の廊下にて一人の女子生徒と出会う。

彼女は出会って早々、なんとも不思議な疑問を彼に投げ掛けてきた。

「トーストじゃないのですか？」と。

その日を境に、これまで閉店営業状態であつた図書室に彼女が通うようになり、本の貸し出しまで行われるようになる。

そして彼らは一冊の本と出会つた。

舞台は現代。ちよっぴりおかしな日常系学園ストーリー。

Prologue

その少女との出会いは、まったくの偶然であつた。

いや、運命というものが本当に存在するならば、それは必然の予定調和だったのだろうか。

彼女との初めての出会い、その場所は学園の図書室前の廊下だった。

彼女は問うた。初対面の彼に向かって。

普通の出会いであれば、おそらく訊ねる者はいないであろう質問をぶつけてきた。

「トーストじゃないのですか？」と。

彼と彼女が会話らしい会話したのは、図書室の中であつた。

正確には、図書室に備えられた司書室のテーブルを挟んで。

彼と対面の椅子に腰掛けていた彼女は、ひざの上に置いていたその本をテーブルの上に置いた。

そして最初の見開きページを開き、無表情のままその小さな口を開いたのだ。

「この本は意味がわかりません」

少女はそうつぶやき、かれこれ数時間は眺め続けたであろうページを撫でた。

全ての本には、それが書かれた理由があつて然るべきだ。
だけど、もしそうであるならば。

「？」の童話

表紙にそう記された、その本は。
何のために、誰のために生み出されたのだろうか。

B o r o n i a

季節は冬。

いつの間にか意味が履き違えられて恋人たちの祭典となったクリスマスが過ぎ。コタツにミカンでのんびりと過ごす正月を越し。またしても恋人たちの祭典であるバレンタインも視野に入ってきた二月の初め。

時刻は放課後。夕方前。彼こと、赤城高雄^{あかぎたかお}は学園内の図書室にて読書に勤しんでいた。

彼が今そうしている理由を簡単に説明すると、まず一つに学園内というのは彼が学生だからだ。

市内唯一にして中高一貫のマンモス校、『呉野学園^{くれのがくえん}』の高等部一年生……それが彼という人間の、現在の肩書きである。

さらに理由を一つ、なぜ図書室なのか。

答えは簡単だ。彼が図書委員だから。そして今は図書委員の受付当番としてカウンターの中に座っているという、実に当たり前理由からである。

おまけにこの場所はストーブを完備している。窓の外で極寒の風が吹きすさぶ中、室内プラス暖房器具というのはそれだけでもう極楽浄土。

それに加え、この場所は非常に静かである。その静寂さは心地よく、本の中に広がる世界へ没頭するにはうってつけだ。

いや、図書室だから静かなのは当たり前だというわけじゃない……言い方を変えましょう。閑散としている。彼以外に誰もいない

のだ。もつともそんなことは今に始まったことじゃなく、彼にとつてはもう慣れっこなわけだが。

「……暇だな」

彼は誰に話しかけるわけでもなく、もう何度目かわからないその言葉を思わずつぶやいた。

だからって状況が変わるわけじゃない。そんな魔法が存在するならば、ぜひとも知りたいものである。

広げていた本を閉じ、あくびを一つ。

受付は人が来ないんだからやることが無い。

本棚の整理はそもそも本が動かされていないんだからやることが無い。

新しい本の入荷なんてまだまだ先の話。本当にやることが無かった。

何をすればよいか少々悩み、結局何の答えもでなかったので引き出しからトランプのセットを取り出してその作業を始める。委員として不真面目だと目くじらを立てる人もいるだろうが、精密機械じゃないのだ。四六時中真面目に振る舞うというのも疲れ果ててしまう。たまには息抜き位いいだろう。

「今日は三段目まで行きたいですねー……っ」と

自分の両手先に細心の注意を払い、彼はトランプでタワーの建設を目指してカウンターのの上にカードを立てていく。

図書委員というのは暇なのだ。他の学校は知らないが、少なくとも

もこの学園に限っては忙しいという言葉とは程遠い。この図書室に人が来ることは稀であった。受付の当番として毎日のようにここへ来る彼以外、誰も寄りつかないのがもはや日常。委員としての仕事はほとんど無い。無いに等しいのだ。

「二段目完成……っ」

震える手先を気合で黙らせ、いよいよ緊張感高まる三段目へと突入した瞬間だった。

本を読みに来る者など皆無な図書室の開かずの扉が、レールを外れそうなほどの勢いでもって開かれたのである。底抜けに明るい女子の声と共に。

「ういーっす！ 遊びに来てやったぞタカー！」

「あ ああああああ……！」

現実是非情である。どれほどの努力をして、それが報われるとは限らない。懸命に積み上げたものが、一陣の風によって吹き飛ばされることもままある。

たとえば、彼の目の前で崩壊したトランプのタワーのように。

「ぼ、僕のスカイツリーがああああ……！」

「なーにをこの世の終わりみたいに叫んで……なんだあ？ 一人で神経衰弱でもしてんのかオメー」

もはや怒る気力すら失せ、彼はただ深いため息をつく。不可抗力だ。目の前の女子には悪意は無いのだから。まるで修行僧のように自身にそう言い聞かせて。

だけでも少しだけ不機嫌そうに答えてしまつのは仕方ないだろう。

「ハルナさん……何をしにいらっしやいやがったんですか」

「んだよ、その言い方。用がなきゃダチのトコに来ちゃいけないっての？ 冷たいねえお前さんは……」

やれやれというジエスチャーの後に、彼女は手にしていたハンバーガーをひと口でたいらげる。

片手に提げている巨大な紙袋。その中には彼女がたった今食べ終えたのと同じ物がぎっしりと詰まっていた。

「いや、そんなつもりは……っていうかいいの？ 生徒会長がこんなトコで油売ってて」

「まだなつてねえんだから頭に新をつけろって。いいんじゃないの？ 生徒会室で待つてたところで、どーせヒマなんだし」

「あつそ……」

適当な受け答えで会話を切り上げ、高雄はカウンター周辺に散らばったランプ達を拾い集めていく。

すぐさま拾うのを手伝ってくれたのは、彼女の素の優しさからだろう。

出来れば扉を静かに開けるとか、彼としてはそっちの方で気を使つて欲しかったのだが仕方ない。

「ほい。これで全部か？」

「みたい……だな。ありがと……で、それは一体なに」

傍らに置かれたいい匂いを漂わせるハンバーガー満載の紙袋を指差し、高雄は尋ねた。

そして彼女は真顔で答える。きょとんと。

「オメエ……目、大丈夫か？ ハンバーガーに決まってんじゃない」

「そんなことは訊くまでもなく分かってる……僕が訊いてるのはだな」

「ああワリい。そういやチーズバーガーも半分くらい混ざってたわ」

「そこじゃないって……質問してんのはさ、なんでそんなに大量に、それもこの場所に持って来たかってこと」

質問し、それに答えながらも彼女は食べるという行為にストップをかけようとはしない。

それを止めたら死ぬとでも言うかのように、包みを広げては食べる動作を繰り返していた。

「大量ってまた大げさな……小腹が空いたから買って来て、ヒマだったから食べながらここに来ただけだったの」

「小腹……ねえ」

喋りながら食べ続ける。いや食べながら喋っているのか。

まるで豆菓子でもつまんでいるかのような軽快さで、常人であれば一、二個で主食になるはずであろうそれを次々と嚥下していく。もはや咀嚼しているのかすら疑わしい。

「一応、図書室内では飲食禁止なんだけど」

「いいだろべつに。読みながら食べてるワケじゃねえし、ゴミはちゃんと片付けるからさ」

「しかし生徒会長が校則を守らないってのも……」

「新をつけるっての……かてえこと言うなって。あれだ。会長特権の前借りってやつだ」

自分が言った台詞が面白かったのか、彼女はケラケラと笑い、そして食す。

彼女はいつもこうなのだ。食欲旺盛、天真爛漫。彼女のために生まれた言葉ではないかと思えてしまうほどだ。

かつらぎはるな

葛城榛名というその女子生徒は、高雄より一つ上の先輩にして幼少時からの幼馴染である。

彼らの会話で話されるようにこの春から彼女は最上級生となり、さらに高等部の新たな生徒会長となることが決定している。

六尺に迫ろうかという高身長は高雄を超え、がさつで喧嘩っ早く、並の男子よりもよっぽど男らしいかもしれない。

けれどその見た目は内面に反比例するように実に女性のそれである。

腰まで伸びる、彼女の元気を現したようなハネ気味の茶髪。パッチリとしていて凛々しい表情を良く映す瞳。高身長と相まってモデル顔負けのプロポーション。

高雄と一年しか変わらない年齢でありながら、既に外見のあらゆる要素が大人の女性として固まっていると言っているといい。

無論、外見のみで生徒会会長などになれるほど甘くはない。けれど彼女はまるで人の上に立つために産まれてきたのではと思うほどの、天性のカリスマとでも言うべき厚い人望を得ていた。それに加えてこれまた天性のと言える生徒会期待のブレーンまでが彼女の味方なのだから、学園内選挙での勝利は約束されていたようなものである。

「なんだよタカ。なんか元気ないぞ？ ……あ、もしかして腹減ってんのか。食うか？」

「いや、いい。ハルナを見てるだけで、もう胃もたれしそうなほど……」

「ハンバーガーのピクルスと、チーズバーガーのピクルス、どっちがいい？」

「両方もなくピクルスじゃないか……ありがとう。いらないよ」

「そっか……だったらさ、遊ぼうぜー。暇で死にそうなんだよあたし」

会話を切り上げてランプ片手にカウンターへと戻ろうとする高雄だったが、彼女が逃がすはずがなかった。

カウンターにうつぶせて、まるで幼児のように駄々をこね始める。いつものことではあるが。

「ハンバーガーに夢中になってればいいんじゃないの？」

「じゃあ食べながら遊ぼう。よし決定っ……ババ抜きからいくか」

気付いたときには高雄の手からトランプの束は姿を消していた。
ハンバーガーを食べながらも瞬時に、気付かれず奪い取ったらしい。まるで忍者のような気配の消し方だと高雄は思い、そしてため息をついた。

「はぁ……いいの？」

「あん？ 何が……あ。実はお前、『トランプの魔人』とか巷で噂されるほどで、そんな俺の真の実力を出していいのか？ とかそういう……」

「どんな魔人だ……違うつて。生徒会の会議か何か脱け出して来たんでしょ？ ここで遊んでいいのかっていう意味だよ今は」

「あたがいなくなつて問題ねえだろ。ダメだったら探しに来るだらーし」

追いかけられる前に仕事するべきだろうと、誰しもそう思うだろうが高雄はそう言わなかった。

彼女は昔からそういう人だ。自分が思ったこと、やりたいことを好きにやってきている。

そしてそれに対する叱責すら楽しんでいる印象である。けれどその実、いざという時には彼女ほど味方になれば頼もしいと思える人間もそうはいないだろう。

注意だけはされないよう、最低限のことは 最低限のことしかない高雄にとっては、少なからず憧れを抱いていた部分ではある。しかし今ではもう諦めた。

自分は自分、彼女は彼女だと。彼の中ではそれでいいということにしてある。

「んじゃ始めつか。まずタカが『ババ』な」

「……すみませんがババ抜きルールから勉強し直してもらえますかね」

「んじゃあ『ババ』無しのババ抜きすつか？」

「それもうゲーム違うから……ババ無いから」

「っコラア！ やっぱりここにいた！」

出入り口方面から突如響いた少女の怒号に、二人とも身体を強張らせて振り向いた。

静かな室内に雷鳴を走らせ、二人の耳を軽く痺れさせたその女子生徒。

彼女はスラリと地に向かう髪をなびかせ、眉間にシワを寄せた険しい表情のまま、彼らのもとへと歩み寄っていった。

B o r o n i a 2

「あだだだだあっ!？」

榛名が悲鳴 いや、そんなに女の子なものではない。どちらかといえば男らしい痛がり方で、声をあげた。

たった今入室してきた女生徒に、問答無用で片耳をつねりあげられた為である。

「ハルナあ……すぐ帰って来るって飛び出してから何分経ってると思ってるのよ! しかもこんなところで油売って……!」

「いつでえよ! 痛えつての!」

「ま、まあまあ、ミユキ。そんな怒らなくても……」

「あんたは黙ってて。これは生徒会内の問題」

「あ、はい……」

眼鏡の奥から向けられるその鋭い眼光と静かな気迫に、高雄は思わずたじろいだ。

高雄と榛名双方にとって幼少からの幼馴染 あまぎみゆき 天城深雪は、まさに才女と呼ぶに相応しい女生徒である。

座学であれば成績は常に学年ベストスリー。教師達からの信頼も厚いが、それに毎回応え得るだけの能力を有していると言っている。高雄と同じ高等部一年生。まもなく二年に上がるが、既に生徒会

きつてのブレーンにして頼れる会計役。

知的さを漂わせる銀縁の眼鏡、その奥にはやや鋭い目尻に茶の眼。緑がかった鈍色にぶいろのロングヘアーには少しの乱れもなく、全ての毛先がスラリと地に向かって伸びて。髪型の名称こそ榛名と同じだが、両者のそれはまさに性格を髪質に表したかのようである。

身長は高雄よりやや低い程度で年頃の女子らしい華奢な体格。しかしその雰囲気からは、榛名とはまた別のタイプで物怖じしない内の強さを感じさせる。

それが彼女という人。その肩書きと成績に外見。

名は体をあらわす……ではないが、彼女はまさに『デキる女』の風格を存分に放出していた。

もつとも現在は、その整った顔立ちも憤怒によって崩れてしまっていたが。

「三年生を送る会での送辞……あんたがいないと練習始められないでしょうが！」

「いだったっ！　だ、だってその前の会議が長引きそうだっていうから……！　ハラ減ったし……」

「なら買うもん買ったらすぐに戻って来なさいよ！　ここに寄る必要はないでしょうが！」

「いやその、暇だったんで遊びたかったっていうか痛え痛え痛えって！」

好ましくない形で一気に賑やに。それどころか騒がしくなった図書室内の空気に、高雄はため息をつくしかなかった。この2人のや

りとりもまた、いつもの見慣れた光景である。

「とにかくさつさと戻るわよ！ 皆待ちくたびれてるんだから」

「だああ、わ、わかったから耳は放し……いであってえっ！」

「じゃあね。お邪魔したわ」

「あ、ああ……うん」

別れの挨拶にはあまりにも鋭い 拒絶にも似たトーンで短い言葉を残し、深雪は図書室の出入り口へと向かった。榛名の耳をつねりあげる右手はそのままに。だが唐突にその足は止まった。

「あ そうだ」

何か言い残したのか、それとも思い出したのか。深雪は扉に手をかけた瞬間に首から上だけを高雄へと向けた。傍らで未だに悲鳴を上げている榛名のことは無視したままで。

「この前の話だけど」

「……悪いけど、返事は同じだよ」

「……そう」

こちらも拒絶 用件を彼女の口から聞く前に、高雄が断りの返答を返した。その顔色には嫌悪というより、無情。何かを諦めた時の表情が、最も今の彼に近いのかもしれない。

そんな彼に、深雪もまた感情を動かすことなく答える。少なくとも

も表面上は。

「自分で　自分の可能性を潰すのね。あなたは」

「……買ってくれるのは嬉しいけど、僕に可能性なんてないよ」

「いいわ。また訊くから　行きましょ、ハルナ」

「そ、それはいいけどいいかげん耳を放し……あだだだっ！」

榛名は抵抗するが、ようやく捕まえた獲物をみすみす逃すほど彼女は馬鹿ではない。引きずって行くのにも近い状態のまま、深雪は図書室を後にした。

「……ふう」

高雄はため息をつき、テーブルと床に散らばったランプのカードを拾い集めていく。平時の状態に戻っただけであるが、閑散とした図書室内の空気は暖かくもどこか重たいものがあつた。深雪の雰囲気伝染したのだろうかと思ふ。

「あ」

カードを束にしていく途中で、彼はそれを目にして気付く。榛名が手にしていたハンバーガー入り紙袋が、椅子の上に置かれたままになっていた。大量のそれはジャンクフード独特の油臭さを未だに放ち続けている。

榛名が取りに来るかとも一瞬考えたが、おそらくそれは無いだろうと思い直した。鷹に捕らえられた小動物のようなものだ。仕事が終わるまでは生徒会室に閉じ込められ、取りに戻って来れる暇も隙

も与えられないに違いない。

「……仕方ない、か」

かといってここに置いたままというのも図書室という場所からして問題があるし、後でグチグチと小言を言われるに違いない。相手はあの榛名なのだ。食べ物の恨みは恐ろしいと言うが、彼女の場合は特に恐ろしいものになるだろう。

高雄は再びため息をつき、ズッシリと重たい紙袋を持ち上げる。現状でこれを届けられるのは自分だけだという事実の前に仕方なく、本当は生徒会室にあまり近付きたくはないという心情は我慢するしかなかった。

「よ……つと!？」

「きゃっ」

その接触が起きたのは高雄が図書室の扉を開き、廊下へと出た瞬間である。

周囲への警戒など微塵もしていなかった彼は、ちょうど図書室の入り口前を通りかかったらしい小柄な女子生徒に激突してしまった。彼女が尻餅をつき、手にしていた鞆の中身 教科書やノート類が床の上に散らばる。

「あ、ああ……ご、ごめんっ」

罪悪感と恥ずかしさ、それに焦りが加わった謝罪を口にし、高雄は廊下に散らばった彼女の私物を拾っていく。途中で、先に彼女の身体を気遣うべきだったかと思っただが、何事も無かったかのように立ち上がりスカートの後ろをはたいている様子を見ると、どうやら

怪我などはしていない様子で一安心した。

「悪かったよ……うっかりしてて」

「いえ。私の方こそ不注意でした」

拾い集めた彼女の私物を手渡し、改めて謝罪の言葉を口にしたところで彼は初めて目の前の少女、その容姿を認識した。そして瞬時に目を奪われた。

まだ幼さこそ残しているが、整った顔立ちと艶やかな藍のセミロングヘア。まさに少女と言える小柄で華奢な体格と、どこか神秘的ですらあるその雰囲気。良い意味で、「まるで人形のような」という言葉が浮かぶ。

加えて短い言葉ではあったが平坦で……ともすると無気力ではないかという、鈴の音のように透き通り　されど感情を微塵も感じさせないその声もまた、印象的で耳に残るものであった。

「あの」

「え……あ、ああごめん……」

彼女に受け取らせておきながら、高雄はその手をノートと教科書の束から離していなかったことによりやく気付いた。その少女に見とれてしまっていたせいだろう。

彼は主に恥ずかしさから、顔を赤く染めた。差し出し、渡しておきながら自分は手を離さないなど、相手から見れば滑稽なことこの上ないはずである。

だが目の前の少女は、高雄を不思議がることはせず……どころか、彼が提げていた紙袋の側へとその視線を向けていた。無言のまま、無表情のまま。

「あ……えつと、その。これは……」

彼はたじろぎ、どんな説明をしたらいいものかと考えた。いくら閑古鳥が鳴いているとはいえ、一応図書室内では飲食禁止なのだ。図書委員である自分が大量のハンバーガーを手にもその部屋から出てきたというのは、うまく言い訳をしないと問題にされる可能性がある。聞いた話では紙袋の中の半分程度はチーズバーガーだとか、そういうことは至極どうでもよかったが。

「んと……これはさ、俺が食べてたとかじゃなくて、さっきまでここに……」

緊張と焦りのせいかうまく言葉が見つけれず、しどろもどろになってしまっている高雄の前に、少女はその小さな口を開いて問うた。無表情極まりなく、眉一つ動かすことなく。

「トーストじゃないのですか？」

「……はい？」

これには思わず高雄も聞き返さざるを得ず、呆氣にとられた。おそらく十人が十人同じような反応を示すだろう。それほどにその少女が口にした質問の内容は唐突で、予想外で、そして謎に満ち溢れたものであった。

「失礼しました。こちらの話です」

「あ、ああ……そう」

失礼であつたかどうかすら高雄には判別出来なかつたが、少女はペコリと頭を下げた。容姿のみならず、その仕草一つすら可愛らしいと言える。表情は相変わらず少しも変わっていないが。

「あ　そうだった……」

目の前の少女にまた目を奪われそうになったとき、自分なぜ大量のハンバーガー入り紙袋を手提げているのかを思い出して我に返ることが出来た。

「ぶつかつてごめんね。ちょっと急いであるから、これで……」

「そうですか。拾つていただいてありがとうございました」

「いやいやそんな……それじゃあ」

適当な挨拶を済ませ、その少女と別れた高雄は早足で生徒会室へ向かつた。彼女から最後にお礼の言葉をもらつたが、嬉しさや恥ずかしさよりも戸惑いの方が大きかつた。彼女の荷物が落ちたのは自分が転ばせたためだというのもあるが、無表情で感謝されるというのはおそらく初めての経験だつたためである。

（綺麗な娘だつたけど……）

先ほどの謎な質問など……気になるところは多々あつたが、それ以上に彼女が着用していた制服のことが高雄には気に掛かつていた。見覚えがあり、どこか懐かしい女子の制服。忘れも間違えもしない、あれは中等部の女子制服だ。スカートの色から察するに、おそらくは中等部三年生……ようするに一つ下の後輩ということになる。

だがそうなると、なぜ彼女がここにいいのかという次なる疑問が

浮かぶ。

この学園は中等部と高等部で学棟が違い、それぞれで完全に独立している。だから中等部の生徒が高等部の学棟を訪れる必要はないはずだし、その逆もまた然りである。高等部の生徒に知り合いでもいるのだろうか。

（……もういないし）

階段を下りる手前で振り返ってみたが、既に彼女の姿はなかった。廊下の向こう端まではそれなりの距離があるはずだが、まるで幻でも見ていたかのように綺麗に消え去ってしまった。

「……ま、いいか」

ひとりごとを口にし。それ以上詮索する気も起きず、面倒くさいという気持ちを態度にしたような気だるさで、高雄は重たい紙袋片手に階段を下り始める。

忘れ物のハンバーガーを届けた先で、飢えた榛名から泣きそうな勢いで感謝されるとまでは想像していなかったが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4681z/>

としょコイ。～閉店営業図書室と、集いし若人たち～

2011年12月15日23時02分発行